





## 育てる くさる

二〇〇〇年四月から出会った三歳児の生活は、「家庭との連携」にこだわりました。お母さんたちが、家庭で大事にしてきたことを引き継いで幼稚園でもしていこうと考えました。「お話をよく聞いてあげました」「おしっこがまだ間に合いません」「絵本が好きで読んできました」「公園で一緒に遊んでいます」とか「うがい、手洗いは必ずしてきました」「粘土遊びの時はスモックを着せてからにします」と、お母さんたちからの話はいろいろです。そして、「だから先生もそのようにしてください」と要望がついています。「いいですよ。一緒にやってみましょう」と、保育者も受けとめていきました。

六月、入梅を迎える前に、夏野菜の苗（スイカ・オクラ・トマト・キュウリ・ナス・トウモロコシ・ミニトマト・ピーマン）を用意して、二組の親子で一つの苗を選び育てることにしました。こどもより

も、お母さんたちが育てることに一喜一憂していききました。「先生、花が咲きました。ピーマンの花つて可愛いですね」「オクラがこんな風にできるなんて知らなかった」「スイカは、小さいときからシマシマ（模様）なんですね。食べるのが楽しみです。Yさんからできたら味見させてねって今から予約付きです」等々。家庭でも気軽にできるように袋栽培にしました。その袋の前が、野菜育て、子育て談義に花の咲く場になっていきました。

蔓性の野菜には、頃合いを見て支柱を立ててやる必要があります。一組のおとな同士の協力作業です。「いつする?」「〇日にしよー」「わかった」とか、「何時にしましょうか?」「うちはいつでも良いですよ」とか、それぞれの会話の口調から関係を察することができると嬉しい光景です。

そんななか、SさんとOさんのくさった顔。「どうしたの?」と尋ねると、「せっかく赤くなるのを楽しみにしていたのに、ほら」と、Sさんが指さし





おいしかったやろなあ」。そのこどもの声に我に返ったおとなたち。「つつかれたところはやめて、後は食べられるでしょう」。「そうですね」と、Yさんがもらって帰ることになりました。翌日の朝「先生、おいしかったですよ。へたは浅漬けにして食べました。こどももおいしいおいしいって食べましたよ。ごちそうさまでした」。よかった！

### 腐った お化け

九月。大きいお化けカボチャの収穫。保育室の真ん中に置いておくと、ドカドカこどもたちが群れてきて、「これ何?」「おおきい!」と、騒ぎ出しました。「これ知ってる? お化けカボチャって言うのよ! お化けのか・ほ・ちゃ」と、ちよつと凄んで話すと、「キヤー」とののり。そののりにまたのっかって「夜になるとね」と続けると、ますますこどもたちの表情が動き出し、「ポカーン ポカーンってね」と続けるごとに息をのんで聞き、「動き出す

んだよ」と話すと、またまたSちゃんが、「キヤー」。「そして動き出すの」というと、またまた「キヤー」。Sちゃんが「夜になると」と、その続きをもう一度聞きたいらしく、「動き出すの」「キヤー」、「夜になると」「キヤー」という遊びになつておもしろがっていると、M男が本棚から、「これと一緒にや!」と、一冊の絵本（チャイルドブックぼう7）を持ってきました。

それは、七月に読んだ月刊絵本で、『おばけなんてなんてないさ（歌絵本）』だったのです。その中の見開きページの「おばけのくにつて こんなく!」にお化けカボチャがいるのです。そのページを開けて、「な! これと一緒にや」と。みんなは、「そう そう」と、のぞき込んでいます。すると、M君、何を思ったのかお化けカボチャめがけてポカーンと一発! わたしは、「あつ! お化けカボチャ叩くなんて、M君の手消えてなくなるよ」と、脅してみました。すると「そんなことないわ」といいな





野菜が腐り土に帰る。人の気持ちがあくさり立ち直る。これは、当たり前のごく自然な摂理なのでしようが、それがしにくい時代になっているのではない

でしようか。

(京都教育大学附属幼稚園)

## 腐るのも大切

— 目に見えない微生物の働き —

村田 容常

### 目に見えない微生物

私たちの世界には目に見えない微生物が一緒に生きています。微生物とは肉眼では見えないが顕微鏡レベルで見える生物のことである。私たちを取りまく

空気中や土の中には無数の微生物がいる。土一グラム中には十億個もの微生物がいて言われている。食品が腐るのはこの微生物のせいである。結核や赤痢などの恐ろしい感染症を起こすのも微生物(病原細菌)だし、食中毒を引き起こすO157や黄色ブ